

名詞修飾句の副詞機能について

島田 雅 晴

1. はじめに

関係節とその主要部、つまり、先行詞が統語的にどのような構造になっているかについて、これまでさまざまな研究がなされてきており、論点も少くない。その論点のひとつとなっているものに、主要部と関係節が基底から付加の関係になっているという考え方と主要部を関係節内からの移動により派生させるという考え方の対立がある。ここでは仮に、前者を外在説、後者を内在説と呼ぶことにする。また、(1a)の関係節に外在説は(1b)、内在説は(1c)のような構造をおおよそ与えるものと便宜的に考える。

(1)a. the boy Nancy loves

b. [[the boy] [Op₁ [Nancy loves t₁]]]

c. [[[the boy]₁] [Nancy loves t₁]]

(1b)の *Op* は空演算子をあらわしたものであるが、つまり、外在説は先行詞は基底から表層と同じ位置に生起していて、関係節内での移動は別のなんらかの演算子がしているというものである。そして、これが一般にとられる分析といって差し支えない。一方、(1c)にあるように内在説では主要部はもともと表層の位置にあるわけではなく、はじめ関係節内に派生されて、その後主要部そのものが移動して、その結果、表層の位置を占めるようになるのである。これは Vergnaud (1974) や、最近では Kayne (1994) で、採用されているスタイルである。

Bhatt (2000) は、形容詞によって先行詞が修飾されている関係節に着目し、内在説を支持する議論を展開している。本稿では日本語の関係節に Bhatt (2000) の論法を当てはめてみて、内在説や Bhatt の議論の妥当性を考察しながら連体修飾の特徴を部分的に解明していくことにする。

2. Bhatt(2000)

Bhatt が取り上げているデータは次のようなものである。

(2)a. The first book that John said that Tolstoy had written

- b. The only book that John said that Tolstoy had written
 c. The longest book that John said that Tolstoy had written

(2)では主要部の book に *first*, *only*, *longest* という形容詞が付随している。Bhattによれば、(2)のような場合、*first* や *only*、そして最上級の形容詞はいまいちな読みをもたらすという。(2a)を例にとり Bhatt は「高い解釈 ('high' reading)」と「低い解釈 ('low' reading)」のあいまい性を次のように説明している。

(3)a. 'high' reading

In 1990, John said that Tolstoy had written *Anna Karenina*; in 1991, John said that Tolstoy had written *War and Peace*. Hence the NP in (2a) is *Anna Karenina*. (i.e. order of *saying* matters, order of *writing* is irrelevant)

b. 'low' reading

John said that the first book that Tolstoy had written was *War and Peace*. Hence NP in (2a) is *War and Peace*. (i.e. order of *writing* matters, order of *saying* is irrelevant)

高い解釈は「ジョンがそういったところの最初の本」という意味になる。それに対して、低い解釈は「トルストイが書いた最初の本」という意味になる。

ここでまず留意しておくことは、外在説であれ内在説であれ、Chomsky (1977) で議論されているような移動が関与している点には違いはないということである。外在説では *wh* 演算子や空演算子が移動するのに対して、内在説では先行詞自体が移動する点が異なっているのである。そして、(2)の関係節はその gap に当たる部分が *said* の補文内にあることから、いわゆる Comp-to-Comp の長距離移動の例である。Bhatt の観察は、長距離移動がかかっている関係節形成でその先行詞内に上記の形容詞があると、その先行詞が補文内で解釈される場合とそうでない場合で意味が異なるというものである。高い解釈というのは、いわば、関係節を形成する最上部の CP の指定部で作用域をとる解釈である。そして、低い解釈というのは、補文内での解釈である。そして、Bhatt は *first book* そのものを一番下の痕跡の位置から移動させる内在説ならばこのあいまい性を説明できると論じ、この種のデータは内在説を支持する証拠であると主張している。

3. 日本語における連体修飾節

Bhatt は前節で略述したように英語を対象に議論を展開しているが、関係節

はさまざまな言語に存在する構造であるので言語の普遍性を考える点からも英語以外の言語でも同様の考察をすることは意義のあることである。そこで本節では日本語の関係節といえる次のような連体修飾節を取り上げることにする。

(4) [[ジョンが書いた]本]

(4)において「ジョンが書いた」が関係節、「本」がその主要部である。ここで主要部「本」に「最初の」、「唯一の」、「最長の」という修飾句を *first*、*only*、*longest* という形容詞に相当する語として用いて、次のような例を考えてみたい。

(5)a. ジョンがビルが書いたと言った最初の本

b. ジョンがビルが書いたと言った唯一の本

c. ジョンがビルが書いたと言った最長の本

(5)のデータはすべて関係節が補文の *that* 節を含んでいて、*gap* もその中に存在している。よって、(2)の日本語版データといえる。(5)に(2)と同じあいまい性が確認できるであろうか。まず、(5a)の解釈を考えてみると筆者には(2a)と同じあいまい性があるように思える。つまり、「ジョンがそのように言った最初の本」という解釈と「ビルが書いた最初の本」という解釈が可能と思われる。¹(5b)についても「ジョンがそのように言った唯一の本」という解釈と「ビルが書いた唯一の本」という解釈であいまいである。(5c)もやはり高い解釈と低い解釈がある。「ジョンがそういった中で最長の本」と解釈できる一方、「ビルが書いた最長の本」という解釈も可能である。つまり、英語も日本語もこの点では違いがないのである。したがって、Bhatt の論法から言えば、日本語も関係節形成には主要部自身の移動が関わっているという結論になる。これが妥当な結論かどうか考察する準備として次節では Kayne (1994) の分析を概観することにする。

4. Kayne (1994)

Kayne (1994) の大きな主張は語順は階層構造によって自動的に決定されるというものである。しかも、反対称的な C-統御関係にある要素間にもみ語順が決定されるというのである。二語が同時に発音されることはないわけで、結局、反対称的な C-統御の階層構造のみ自然言語では許されていることになる。しかも、UG がみとめているのは「指定部—主要部—補部」という順序のみと主張されている。特に関係節については、それは CP で D の補部であると考えら

¹ 動詞を「言った」ではなく「思っている」にすると低い解釈がでやすくなるように思われる。

れている。

例えば、*the picture that John bought yesterday* という関係節は D である *the* が CP を補部としてとっているのである。

(6) [DP *the* [CP *picture that John bought yesterday*]]

先行詞の *picture* は CP の指定部の位置を (6) では占めているのだが、それははじめからそこにあったのではなく、*bought* の目的語の位置から移動してきたものである。

(7) [DP *the* [CP *picture*₁ [that John bought *t*₁ yesterday]]]

関係節を導いているものが補文標識の *that* ではなく *wh* 句の関係詞である場合には次のような構造であると分析されている。

(8) [DP *the* [CP [DP *picture*₁ which *t*₁]₂ [John bought *t*₂ yesterday]]]

which picture が *bought* の目的語の位置から CP の指定部の位置に移動し、その後 DP である *which picture* の内部で *picture* がその DP の指定部の位置に移動するのである。

日本語の関係節もやはり CP で D の補部であると考えられている。しかし、(7) のような構造では日本語の表層の語順にならない。

(9) [DP [CP 絵₁ [TP ジョンが昨日 *t*₁ 買った]]]

そこで、Kayne は (9) の TP、つまり、「ジョンが昨日 *t*₁ 買った」が DP の指定部に移動し、次のような構造になると考える。

(10) [DP [TP ジョンが昨日 *t*₁ 買った]₂ [CP 絵₁ *t*₂]]]

Kayne の分析では英語と日本語の違いはこの TP の移動があるかないかであり、先行詞自身が移動する点は同じなのである。

5. 日本語の関係節の派生について

3 節では Bhatt が英語に対して試みたテストを日本語に対してあてはめてみた。ここで、(5) を再掲する。

- (5) a. ジョンがビルが書いたといった最初の本
- b. ジョンがビルが書いたといった唯一の本
- c. ジョンがビルが書いたといった最長の本

(5) で観察されたことは Bhatt が英語で観察したのと同じように高い解釈と低い解釈であいまいであるということであった。このあいまい性の原因を関係節の主要部自身の移動に帰している Bhatt の主張を受け入れるとすると、4 節で要約した Kayne の日本語の関係節の分析と (5) の事実は見事に整合する。つま

り、日本語でも関係節の主要部がそれ自身移動するということが証明されたことになるのである。

ところが、日本語の関係節形成には移動が関与していないということを示唆するデータがかなり以前から指摘されており、例えば、Kuno(1973)にある次のようなデータは有名である。

(6) [[着ている洋服]が汚れている]紳士]

先行詞の「紳士」は関係節内のどこで gap になっているかといえば、「着ている洋服」という複合名詞句内である。複合名詞句は、要素がここを抜けて移動することができない領域である。したがって、(6)のようなデータをもとにして、日本語における関係節内の gap は移動の結果残された痕跡ではなく音形がない代名詞の pro である、と一般的には考えられているのである。この分析は Kayne の内在説とは相容れないものであり、事実、(6)のようなデータが kayne の分析の経験的問題になるとして Fukui and Takano (1999)などで批判されている。

ここでとるべき立場として次の2つが考えられえる。

(7)a. (6)のような関係節では先行詞の移動は関与していないが、(5)のような関係節では先行詞が移動している。

b. Bhatt の観察自体に間違いはなく、また、日本語も英語と同様の振る舞いをみせるが、その現象の分析を Bhatt は誤っており、したがって、この種のデータでは内在説を論証できない。

(7a)は日本語に複数種類の関係節を認めるものである。確かにこれまで日本語の関係節の中にも移動が関与するものがあることは指摘されてきた。しかし、そのような関係節はみんな数量表現を含むものであり、今回問題となっている関係節とは異なっている。したがって、またあらたに(5)のタイプの新種の関係節の存在を主張することになり、その証明はそう単純ではなさそうである。さらに、(6)のように複合名詞の中に gap を持つ関係節でその先行詞に「最初の」や「唯一の」をつけたものでもなんら不自然には響かないという事実がある。

(8)a. 太郎が[漱石が書いた部屋]を見学した最初の本

b. 太郎が[漱石が書いた部屋]を見学した唯一の本

このことから(7a)は排除することを考えたくなる。しかし、(8)が何を物語っているかを結論付けるのはそう単純ではない。

ここで、Bhatt が言及した高い解釈、低い解釈についてもう一度確認してお

く必要がある。(2a)と(3)を再掲する。

(2) a. The first book that John said that Tolstoy had written

(3) a. 'high' reading

In 1990, John said that Tolstoy had written *Anna Karenina*; in 1991, John said that Tolstoy had written *War and Peace*. Hence the NP in (2a) is *Anna Karenina*. (i.e. order of *saying* matters, order of *writing* is irrelevant)

b. 'low' reading

John said that the first book that Tolstoy had written was *War and Peace*. Hence NP in (2a) is *War and Peace*. (i.e. order of *writing* matters, order of *saying* is irrelevant)

繰り返しになるが、(3a)の高い解釈は「そういった最初の本」であり(3b)の低い解釈は「書いた最初の本」である。したがって、例えば(8a)においては、高い解釈は「部屋を見学した最初の本」であり低い解釈は「漱石が書いた最初の本」ということになる。確かに(8a)は自然に響くが、どのような解釈がなされているか内省してみればそれは高い解釈の「部屋を見学した最初の本」であり、また、それのみである。したがって、(8)は複合名詞句の中での解釈がないので、一見すると先に述べたこととは逆にこれは Bhatt の移動による分析を支持することになるのである。ところが、高い解釈の出所がどこかを考えるとこれがよくわからないのである。つまり、(8)の関係節の gap は「漱石が書いた部屋」という複合名詞句内にあるのであり、「太郎が見学した」という関係節内にはないのである。よって、(8)には移動が関与していないことになり、先行詞自身の移動に高い解釈を帰する Bhatt の分析では(8)の解釈が説明できないということになる。ここではじめて(8)が Bhatt の分析に対して問題を提起している例であることがわかる。

そもそも日本語には gap のない、いわゆる gapless 関係節が存在する。

(9) [私がその人の名前を忘れてしまった]お客さん (Kuno(1973))
先行詞の「お客さん」に対応する要素は関係節内で「その人」として生起しており、gap はない。それであっても先行詞内に「最初の」が生起できる。

(10) [私がその人の名前を忘れてしまった]最初のお客さん

(10)もまた(8)と同様、このような関係節の解釈に gap のあるなしは無関係であることを示している例である。したがって、Bhatt の観察は移動を立証するものとはみなさず、以下では(7b)の立場をとり(5)の関係節の解釈がどのよう

に生じるかについて若干の考察をすることにする。

6. 連体修飾句の副詞用法

Bhatt は先行詞自体が関係節内から移動してきたものと分析したが、そもそも次の2例の論理的意味は同じであろうか。

(11)a. 太郎が書いた最初の本

b. 太郎が最初の本を書いた

(11a)と(11b)を見る限り、両者は同じ内容を述べているように思える。つまり、両例とも、太郎は本を何冊か書いていてここに登場している本ははじめて書かれたもの、と解釈できる。しかし、動詞を「書く」から別の語に変えると状況が一変する。

(12)a. 太郎が批判した最初の本

b. 太郎が最初の本を批判した

(13)a. 太郎が捨てた最初の本

b. 太郎が最初の本を捨てた

(12a)は太郎が批判した本の中の最初のものという意味であるが、(12b)ではなかなかその解釈が得られない。太郎が本を批判する役になっていてその対象となるべき本が複数ある状況が前もって想定されているとすれば、その意味で解釈しやすくなる。つまり、批判の最初の対象となる本を批判した、と解釈できるのである。この状況が想定されていなければ何の最初なのかがわからないのである。「批判する」についてはなんとか状況を設定できたが、「捨てる」ではさらに難しい。したがって、(13)では(12)よりさらに(a)と(b)が同意にとりにくい。(13a)ではすぐに、捨てた本の中の最初のもの、と解釈できるが、(13b)の「最初の本」にはそれに対応した、捨てるべき本の中の最初のもの、と言う意味がすぐにはでてこない。それよりも「最初に書いた本」といった意味のほうが思いつきやすい。したがって、(13a)と(13b)を同意にはなかなかとれないのである。

そうであるならば、(11)も(a)と(b)が同意とはいってもそれは異なった仕組みによると考えるべきである。(11b)の「最初の本」でもやはり(12b)や(13b)と同じように何の最初かが想定された状況から解釈されるのである。この場合たまたま「書いた」という動詞が文内に生起しており、また、たまたま「本」という語が持つ意味と「書いた」の意味が相性がいいので「書いた最初の本」と意味をとりやすいだけなのである。(11a)で「書いた本の中の最初の本」と

いう意味にとれるのとは解釈過程が異なっていると本稿では考える。(12a)や(13a)もそれぞれの(b)の文とは異なった意味解釈の過程をとり、「～した中の最初の本」という意味に難なくとることができるのである。

具体的には、(11a)は(11b)よりもむしろ(14)の構造と関連があると考ええる。

(14) 太郎が最初に本を書いた

同様に、(15a)は(15b)よりはむしろ(15c)に由来すると考える。²

(15)a. 太郎が書いた唯一の本

b. 太郎が唯一の本を書いた

c. 太郎が唯一本を書いた

(11a)と(14)、(15a)と(15c)のペアを同じような意味にとることは可能である。

(11a)や(15a)では「最初の」、「唯一の」は形式的には連体修飾句であるが、その機能は副詞的なのである。連体修飾句の副詞機能は英語でも見られることである。(16)と(17)は Soames and Perlmutter (1979)からの引用である。

(16)a. He is a mere child.

b. He is merely a child.

c.*He is a child who is mere.

(17)a. He is a potential candidate.

b. He is potentially a candidate.

c.*He is a candidate who is potential.

(16a)と(16b)、(17a)と(17b)は同じような意味である。ただ、本論での主張は、(11b)と(14)、(15b)と(15c)を平行的にとらえるということではない。それよりもむしろ両者はまったくの別構造という主張になる。そして、先に述べたように(11a)は(11b)でなく(14)、(15a)は(15b)でなく(15c)に由来すると考えるのである。

では具体的な分析はどのようになるであろうか。一番素朴な分析は、例えば、(18a)の基底構造から(18b)を派生するというものである。

(18)a. [[太郎が最初に pro 書いた]本]

b. [[太郎が t₁ pro 書いた][[最初の]₁本]]

あるいは基底構造を(19a)のように考えて空演算子が移動して(19b)のようにな

² 「最長」については副詞用法がない。ここではひとまず(i)は(ii)と関係していると考えことにする。この点については後でもふれる。注3を参照。

(i) 太郎が書いた最長の本

(ii) 太郎がもっとも長く本を書いた

ると考えてもよい。

(19) a. [[太郎が最初に Op pro 書いた] 最初の本]

b. [[太郎が t1 pro 書いた] [Op1[最初の本]]]

まず、このような移動を仮定することで(5)のあいまい性が説明できる。

(5) a. ジョンがビルが書いたと言った最初の本

b. ジョンがビルが書いたと言った唯一の本

c. ジョンがビルが書いたと言った最長の本

高い解釈の場合は「言った」の節、低い解釈の場合は「書いた」の節から副詞要素が移動してくると考えればいいわけである。さらに、(8)も考えてみたい。

(8) a. 太郎が[漱石が書いた部屋]を見学した最初の本

b. 太郎が[漱石が書いた部屋]を見学した唯一の本

これらのデータは複合名詞句内で「最初の」、「唯一の」が解釈できない例であった。同様の不透明性は Negative Island の現象からもうかがえる。Bhatt によれば、(18)には低い解釈はないということで、内在説を支持する証拠の一つとみなしていた。

(20) a. This is the first book that John didn't say that Antonia wrote.

b. This is the longest book that John didn't say that Antonia wrote.

c. This is the only book that John didn't say that Antonia wrote

日本語でこれと同じ趣旨のデータを確かめてみる。

(21) a. 太郎が漱石が書いたといわなかった最初の本

b. 太郎が漱石が書いたといわなかった最長の本

c. 太郎が漱石が書いたといわなかった唯一の本

(21)はすべて(20)と同様低い解釈がない。日本語の関係節形成に移動が関与していないとするならば(8)や Negative Island の現象は先行詞や関係節演算子の移動にたよることはできない。(18)や(19)のように副詞要素それ自身、あるいはそれにあたる空演算子の移動を認めるならばこれらの現象はすべて移動に関わる制約で説明可能となる。また、移動といっても副詞的な要素であるので関係節内で項が gap になっていない(10)のような例に対しても応用可能な分析である。³

³ (18)のように「最初」などの修飾要素それ自身が移動するのか(19)のように空演算子が移動するのかについて考えるには、注 2) で述べたような事実が示唆的と思われる。以下では空演算子の移動を仮定して議論を進めることにする。

さらに、意味をよく考えてみることもここでの分析の妥当性を考える上で重要である。先に述べたように、(11a)と(11b)の派生には関連がない、というのが本論の主張である。

(11)a. 太郎が書いた最初の本

b. 太郎が最初の本を書いた

(11b)の「最初の本」の形成は(11a)のそれとは異なり、解釈過程が違うのである。つまり、何らかにおいて最初となる本、という意味で、意味処理がこの名詞句内で完結するのである。(11a)は、これまで見てきたように、「最初の本」という名詞句内のみで意味解釈されるのではなく、関係節の中での副詞機能も含めての意味解釈なのである。

ところが、おもしろいことに、よく観察してみると(11a)の「最初の本」にも(11b)と同様の名詞句内完結型の解釈処理が可能なののである。(12a)と(13a)を再度取り上げることにする。

(12)a. 太郎が批判した最初の本

(13)a. 太郎が捨てた最初の本

例えば、(12a)でも文脈さえ整えれば、花子が最初に書いた本を太郎が批判した、と解釈できると思われる。つまり、「最初の本」内で完結した(12b)と同じ意味処理が(12a)の「最初の本」になされているのである。実際、次の例はまったく自然に花子をはじめて書いた本と解釈できる。

(22) 太郎が批判した最初の本があったらこそ、花子是有名になった。

したがって、(11b)の「最初の本」が移動して(11a)が形成されたと考えてもよさそうである。しかし、そのような解釈の場合、上述の移動に関わる制約の現象が見られない。

(23)a. 太郎が批評家が読む前に渡米してしまった最初の本について花子にコメントした。

b. 太郎が批評家が読んだといわなかった最初の本について花子にコメントをした。

(23)の「最初の本」も花子をはじめて書いた本ととれるが、この場合それがまた「読む」の目的語としても解釈できる。すなわち、この場合は移動がなく、移動の島となる節の中で解釈可能となるのである。たとえ意味処理が同じであっても(11a)を(11b)の「最初の本」の移動としては説明できないのである。「最初の本」の移動を仮定しない本稿の分析とは矛盾しない現象であり、空演算子が移動する場合に意味が異なると説明できる点でも優れている。つまり、(11a)

はあいまいであり、それを説明できるのである。

さらに、次のような例が可能である。

(24) 太郎が最初に批判した最初の本

関係節内に副詞として「最初に」が生起している場合、「最初の本」は太郎が最初に批判した本という意味にはならない。太郎が最初に批判した、という意味は関係節内で解釈されているので、さらに先行詞のところはその意味を持たせると解釈不可能になるのである。したがって、(24)の「最初の本」にはその句の内部で意味解釈する過程がとられ、太郎が最初に批判した本、という意味を持たなくするのである。このような細かい意味についても本稿の分析で説明可能となるのである。⁴

7. おわりに

本稿では内在説を支持している Bhatt の議論の一部を日本語にもあてはめてみた。その結果、Bhatt が観察している高い解釈、低い解釈という現象は内在説を支持する決定的な議論にはならないことをみた。本稿では外在説と内在説のどちらが正しいかの決定や関係節構造に対する詳細な理論的分析はなされていない。しかし、本稿での観察がさらなる研究へのヒントになるはずである。

⁴ これまで扱ってきたのとは異なるが、やはり、副詞的用法と関係がありそうなほかの類の連体修飾句が存在する。それは、副詞的には depictive の 2 次述語として振舞う要素である。

(i) a. 太郎が裸でおどった。

b. 太郎が魚を生で食べた。

「裸で」、「生で」が depictive な 2 次述語である。これらを連体修飾句で用いると次のようになる。

(ii) a. 裸の男

b. 生の魚

これに関係節をつけてみると次のようになる。

(iii) a. 昨日おどった裸の男

b. 太郎が食べた生の魚

これまで観察してきたデータと並行的に扱うならば、(iii) はそれぞれもとは (iv) のようになる。

(iv) a. 昨日裸でおどった男

b. 太郎が生で食べた魚

(iiia) と (iva) は明らかに意味が異なるが、(iiib) と (ivb) に関してははっきりとしない。おそらく、2 次述語に関連する連体修飾句は本稿で「最初の」などとは別の分析が必要になるように思われるが現在のところそれを裏付ける証拠や具体的な提案はないので今後の興味ある課題としておく。

References

- Bhatt, R. 2000. Adjectival modifiers and the raising analysis of relative clauses, NELS 30, 55-67.
- Chomsky, N. 1977. On *wh*-movement, in P. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian, eds., *Formal Syntax*, Academic Press, New York, 71-132.
- Fukui, N. and Y. Takano. 1999. Issues in word order and the structure of noun phrases. In O. Fujimura (ed.), *Proceedings of linguistics and phonetics 1998*.
- Kayne, R. 1994. *The antisymmetry of syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Kuno, S. 1973. *The structure of the Japanese language*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Soames, S. and D. Perlmutter. 1979. *Syntactic argumentation and the structure of English*, University of Chicago Press, Berkeley and Los Angeles, California.
- Vergnaud, J.-R. 1974. *French relative clauses*, Ph. D. Diss., MIT.